

# フランシス・マカンバーの変容：弱者たちとの共感

——「フランシス・マカンバーの短い幸福な生涯」再読——

渡 辺 佳 余 子

## 1 『コスモポリタン』とヘミングウェイ

Ernest Hemingway は、短編集の序文で、「フランシス・マカンバーの短い幸福な生涯」<sup>1)</sup> を、「七つの好きな短篇」の一つにあげている。「マカンバー」が、作者自身だけではなく、読者の心をも捕らえたことが、発表された批評の数の多さからもうかがえる。ほとんどの批評家は、例えば、Philip Young のように、主人公フランシスが、狩猟ガイドウィルソンのコードを習得して、勇敢な男に変身する物語として解説する。<sup>2)</sup> 確かに、「マカンバー」には、臆病なフランシスが勇敢になる過程が描かれている。しかし、結末部分の「妻による夫殺し」は、様々な解釈が施されており、この解釈の難解さも、多くの読者を魅了し続けている。妻マーゴットが、水牛を「狙い撃った」という表現に着目した Warren Beck は、夫殺しを否定する批評家の一人であり、「マカンバー」を単純な勇気獲得の物語とすることにも懐疑的である。<sup>3)</sup>

本稿では、「マカンバー」を、フランシスが勇敢なヒーローになる過程を描いた物語としてとらえるが、その過程を、彼の複雑な心情の変化によるものと解釈する。また、ピッチと呼ばれ、特に論じられることもないマーゴット<sup>4)</sup> や、脇役としてもほとんど見えない存在にすぎない銃器係などの、サファリの地アフリカの使用人たちに注目して、白人男性社会の中で虐げられてきた者たちに眼差しを向けたい。

このような再読が可能になるのは、「マカンバー」が、1936年9月に、アメリカ中産階級の既婚婦人が好んで講読した『コスモポリタン』に発表されたことにあるといえよう。ヘミングウェイが雑誌記者として創作を始めたことを思えば、彼は雑誌の購読部数を伸ばしたいという職人意識を持っていたのではないだろうか。そのため、『コスモポリタン』を購読する女性読者の存在を意識して執筆したと考えられる。したがって、フランシスのヒーローへの変身が、女性読者の賛同を得るようなものにするための工夫を凝らしているように見える。

このような背景から、本稿では、フランシスとマーゴットのジェンダーの交換、アフリカの使用人たちとフランシスの共感、そして、ヒーローになったフランシスが死の間際に得た信仰の兆しなどに着目し、男性読者に受け入れられるであろうような読みとは異なった視点から論じ、その上でヘミングウェイ自身が「好きな短編」とした理由を探りたい。

## 2 交錯するジェンダー

アメリカからアフリカへ狩猟旅行に来たマカンバー夫妻の心情には、3日という短い時間の流れの中で、極端な変化が見られる。ライオンの遠吠えを聞いて以来、恐怖感に襲われ臆病になるフランシスに対して、勇敢で大胆なマーゴットという関係が始まり、これが水牛狩りを契機に逆転する。

夫が勇敢になり、このような夫の変化にとまどい、妻は、不安になる。これは、異国の地アフリカという異質な環境のなかで「女性的」になってしまう夫と、家庭の外に出て解放され「男性的」になることができた妻という関係が、狩猟という行為を通じて、夫が「男性性」を奪還し、妻が従来の意味で、「女性性」の中に後退していくという構図になっているように思われる。

ライオンの声への恐怖から眠れなかった夫に対して「あたしを起こしてくれれば良かったのに。あたしも夜中に聞きたかったわ」<sup>9)</sup>と迫る妻の姿には、臆病な男と勇敢な女という形で、従来のジェンダーの交換がなされており、勇気を得た妻は日頃の夫への恨みを晴らすチャンスを狙うことになる。狩猟やボクシングなど、男性的なものを描くヘミングウェイの作品世界では、手負いのライオンから遁走するフランシスは、「男性性」の喪失の究極的な姿を呈している。そして、マーゴットは、夫の醜態を見たあと、帰りの車の中で、慰めを求めて手をとろうとする夫の手を振り切り、前に座るウィルソンの肩に手をおき彼の口にキスするという大胆な行動に出る。さらに、その晩には、ウィルソンと肉体的な関係を持つ。翌朝、「あんた、実はぼくの女房とキャンプに残って、ぼく一人で水牛狩りに行かせたいんじゃないのか？」というフランシスは、ただの「女々しい」嫉妬深い中年男と化している。

ウィルソンは、アメリカ人女性について、「最高に」を繰り返しながら「扱いづらく、冷酷で、利己的」と批判するが、「最高に魅力的」と締め括る。このような女たちの相手となる男たちは、彼女たちが強くなるにつれて「軟弱になるか、神経をズタズタにされてしまう」と言う。ウィルソンのセリフから、ヴィクトリア朝的イギリス女性とは異なる、男まさりのアメリカ女性の像が浮かぶ。そのため、アメリカの男女においては、ジェンダーの交換が可能になると言える。実際、この短編の下地になったヘミングウェイと妻のポーリーンの狩猟旅行で、ライオンを撃ち損じたのは妻で、助けたのが夫であったにもかかわらず、妻が現地スタッフから祝われたという事情をあげて、James Mellow は、「例のヘミングウェイのジェンダーの交換」と指摘している。<sup>6)</sup>

こうして、女性的な夫と男性的な妻という役割から始まることで、当時男女に一般的に適用されていた性質が逆に採択されていることは、ジェンダーの二項対立が脱構築されて、男性的、女性的という境界線が、実は曖昧なものであり、交換可能なものなのだという、ジェンダー論の先取りがなされているといえよう。実際、ヘミングウェイは、この男女の役割交換というテーマに終生捕らわれていたことが、「マカンバー」以前には、『武器よさらば』（フレデリックに「そっくりになる」ことを迫るキャサリン）に、以後には、遺稿『エデンの園』（夫デイヴィッドと同じ髪型をして男女の性の役割交換を迫る若妻キャサリン）に描いていることからもうかがえる。

マカンバー夫妻の結婚生活が維持されている「健全な基盤」とは、妻は離婚するには美しすぎ、夫は裕福すぎることであり、互いの利己的な理由から一緒にいるにすぎない。浮気をし、悪女のようなマーゴット、妻の横暴に耐える弱気な夫フランシスという表面的なイメージにもかかわらず、実際は、横暴な夫、耐える妻という夫婦であったことを示唆する箇所がある。

His wife had been through with him before but it never lasted. He was very wealthy, and would be much wealthier, and he knew she would not leave him ever now.

……, he had always had a great tolerance which seemed the nicest thing about him if it were not the most sinister. (418)

「妻に愛想尽かしされたことは前にもあったが、それは決して長続きしなかった。彼はかなりの財産家だったし、もっと財産を増やせる見込みもあった。いま、この時期に妻が去っていくはずはない、と彼は思っていた。……彼は、終始、並はずれた寛容さを備えていて、それはきわめて陰険な面として現れなければ、彼の最上の美点のように思われた。」

ここには、妻を金の力で縛り、寛大さを装っている夫の心の奥底には、「陰険」なものが宿っていることが読みとれる。

フランスの陰険な性質は、マーゴットがライオン狩りでの夫の醜態に愛想を尽かし、ウィルソンと浮気をした晩の翌朝、水牛狩りに出る前の朝食時に露見する。夫は悪態をつき、「おまえ、こんな不潔な料理を食べたことがあるか？」と妻に言い、現地の料理人を蔑む。ウィルソンが「給仕をするボーイの中には、英語がいくらかわかる者もいるんだ」とたしなめると「くそ食らえだ、ボーイなんか」と答え、妻が注意すると「おまえのほうこそ、行儀よくしたらどうだ？」と攻撃の矢を向ける。このとき、妻は「そう努めてきたのよ、ずっと前から。ずいぶん長いあいだ」と答える。この妻の短い言葉に、苦しみに満ちた結婚生活の歴史が示されているように思われる。

つまり、「ヘミングウェイの氷山の一角説」が「マカンバー」においては、陰険な夫への忍従を余儀なくさせられてきた妻という夫婦関係であるといえよう。Rena Sanderson も、この短編が「女の行動は、夫の欠陥とは切り離せない」と指摘して<sup>7)</sup>、フランスの非を認めている。マッチョな男性を描くことが多いヘミングウェイではあるが、マーゴットのセリフにうかがえる、妻という立場の哀しみを通して、エクリチュール・フェミニンともいえる、女たちへのやさしい眼差しがあると見え、ここにも『コスモポリタン』の読者を意識している作家の創作姿勢がうかがえる。

「マカンバー」で、「アメリカ女特有の冷酷さ」「最もいやらしい」とウィルソンに言わせている作者ヘミングウェイは、このようなアメリカの女性たちに惹かれていたのではないだろうか。丸田明生によれば、マーゴットには、ジェイン・メイソンという実在のモデルがいたという。<sup>8)</sup> ジェインは、マーゴットのように大金持ちの夫を持ち、ヘミングウェイと不倫関係にあったという。ヘミングウェイは、彼女から一方的に振られたことで、「一番手に負えない悪女」をモデルにして描いたと告白している。<sup>9)</sup>

このように、アメリカンピッチを憎みながらも、惹かれてしまうというヘミングウェイの複雑な女性観は、彼にとっての最初のアメ리카女性であり永遠のピッチであり続けた母親グレイスの影響があるとされている。多くの批評家は、彼が母親の呪縛に囚われ続け、母との決裂した関係が終生尾をひいていたということを論じている。母がヘミングウェイに与えた強い影響のうち、注目すべきは、Kenneth Lynn の伝記においても指摘されているように、ヘミングウェイが、幼少時に一つ違いの姉と服装や髪の色好まで双子のように育てられたという幼児体験である。ヘミングウェイが、このことのために、意識下に潜むようになってしまった女性的な感情と決別するために、過剰なまでに、マッチョな男性像を追ってきたのだとリンは述べている。

作者同様に女性的な面があるように思われる、ライオンの遠吠えを聞いて臆病になっていたフランスではあったが、水牛狩りを契機に勇敢な男に変身することができる。彼が、水牛狩りが成功した高揚感に浸り、生き生きとしていけばいくほど、妻は反対に落ち込んでいく。狩猟という男性の行為領域ともいえる行動から変身していくフランスは、自己の気持ちを分析して「純粹の興奮」にあると述べる。この感情は、一般的に「理性的」と分類されることの多い男性性の対極にあるものであり、女性の領域にある感情と定義するならば、フランスが変身していく過程が、肯定的な意味での女性性に助けられたことになる。理性という領域にいた男性性を保持していた他者である夫が、自分の領域に入ってきては困るとマーゴットは思ったのではないだろうか。そして、このような夫は消えてもらうしかない結論を出し、銃で撃ち殺すという男性性の領域であった方法で夫殺しを果たす。マーゴットは、夫殺しをしたこの瞬間は男性性にあるといえるが、その直後にヒステリックに泣きじゃくる姿は、再び女性性を奪還したように思われる。

このような男女のジェンダーが瞬時に入れ替わるというテーマは、ヘミングウェイを捕らえていたことはすでに指摘した。このことから、マッチョぶりを誇示していたヘミングウェイが、実は

女性的であったのではないと言われることもある。マカンバー夫妻に見られる性差の交錯には、フェミニズムの問題を、「性差を超えた」人間そのものの改造に解決を求め、「抑圧されているのは女だけではなく、男たちもまた……深く傷ついて」いて、「力の倫理だけではなく弱さの意義をも受容するような、新しい視点」<sup>10)</sup>が必要とされる現在のフェミニズム理論の先取りをしていたと言えるのではないだろうか。このことは、ヘミングウェイが『コスモポリタン』の女性読者を意識していたように思われ、彼の作家としての戦略を垣間みることができる。そして、マカンバー夫妻に採択された男女の役割交換というテーマは、やがて男女の性の交換、両性具有願望、同性愛として、遺稿『エデンの園』で全面的に描かれることになる。

### 3 「マカンバー」における人種と階級

裕福で長身でハンサムな白人アメリカ人のフランシスとは対照的に、中背で赤ら顔のウィルソンは、狩猟にくる客の妻たちが、狩猟ガイドと寝台を共にしないうちは、「支払った料金の代価を得ていないと思うらしい」と、有閑階級の女性を批判する。ウィルソンにも実在のイギリス人ガイドフィリップ・パーシバルというモデルがいたようだが、この短編で描かれるウィルソンは、純粹の白人ではないように思われる。何故なら、彼は「赤ら顔」であると数度言及されており、彼自身「血管のせい」と自分の肌の色を説明しているからだ。

ここに、ワズプで上流階級のマカンバー夫妻と、彼らに雇われる純粹の白人ではない狩猟ガイドという階級構造が成り立つ。そして、さらに、最下層に位置するアフリカの使用人たちがいる。ウィルソンは、夫妻とアフリカ現地人の間に位置していて、仲介者の役割を演じるのだが、仕事仲間のアフリカ人たちの味方であり、彼らの理解者でもある。Peter Messent も、声なき彼らに着目して、この短編における「アフリカの声」の存在を主張しているが、彼は、「マカンバー」における人種問題について、使用人たちを「ボーイズ」と呼ぶウィルソンを人種差別主義者とみなしている<sup>11)</sup>。また Kenneth Lynn は、ウィルソンの赤ら顔を、「イギリスの植民地主義的 bloody mindedness を表わしている」と言い<sup>12)</sup>、ウィルソンをアフリカ人たちの良き理解者とみなしてはいない。

しかし、ウィルソンは「このアフリカじゃ、ライオンを撃ち損じる女はいないし、白人の男で逃げ出すやつもいませんよ」と言っており、これは、彼がイギリス人でありながらもアフリカを愛していて、臆病なアメリカ人であるフランシスを軽蔑していることがわかる。また、彼がスワヒリ語を話し、銃器係と会話を交えることができることは、ウィルソンと銃器係との間には、心の交流がなされていることが示唆されているのではないだろうか。

ヘミングウェイは、荒廃したアメリカ文明を嫌い、緑深き処女地ともいえるアフリカを愛した。このことは、「マカンバー」「キリマンジェロの雪」『アフリカの緑の丘』に描かれた1933年のアフリカ旅行に、そして、生誕百年記念に出版された『ケニア』に描かれた1953年の、20年ぶりのアフリカ再訪にうかがえる。「マカンバー」に書かれている最初のアフリカ訪問のときには、ヘミングウェイと二番目の妻ポーリーン夫妻に財政援助を続けたポーリーンの叔父、オーガスタス・ファイファー（丸田 180）へのうとましさから、富裕な階級への反感を抱いていたようである。このような感情がマカンバー夫妻への批判、彼らと対照的な立場にあったアフリカの人たちへの暖かい眼差しとなったように思われる。

ヘミングウェイは、アフリカの銃器係たちに対してだけではなく、周縁化され、他者化され、沈黙を強いられ、見えない存在とされていた人たちに、やさしい眼差しを向けることが多い。『老人と海』で見事に「老い」を描き、周縁化された老人を偉大なヒーローに仕立てたヘミングウェイだが、「マカンバー」では、人間に興味で殺害されるライオンや水牛に対してさえ暖かい眼差しが向けられる。撃たれるライオンは、咳き込むような声で吠える「老兵」(an old-timer) である。ウィ

ルソンは、このライオンを「惚れ惚れするよう」と誉め、老いてはいるが早朝の微風に暗褐色のたてがみを揺らす姿は堂々としており、遠吠を聞いて怯える臆病なフランシスとは対照的に描かれている。

ライオンの「首の骨を狙って倒せ」というウィルソンの指示を忘れ、手当たり次第に撃つフランシスが、ライオンの気持ちをもつめたのだという詳しい描写がある。ライオンの、最後の力を振り絞って草むらに逃げ込み、「あれ[銃]を持っている男を餌食にしてやろう」と「一気に飛び出す」勇敢な行動は、ライオン自身の視点から描かれている。John Killinger も指摘しているように、有能なハンターでもあるヘミングウェイは、威厳を持って死と対峙する動物として、ライオンを深く尊敬していた。<sup>13)</sup> フランシスがやがて尊厳なる死を迎えることができるようになるのは、この老ライオンとの遭遇が影響を与えていると考えられる。

傷を負ったライオンを、「草むらに放っておけばいい」と主張するフランシスを、ウィルソンがライオンは「苦しんでいる」のだとたしなめる。ウィルソンのこの言葉は、人間たちの狩猟という趣味のために殺害されなくてはならない動物たちの苦しみが象徴的に表されているのではないだろうか。ウィルソンは死んだライオンを「見事なライオンだ」と称える。フランシスがアフリカで狩猟をする資格など持っていないことを示唆しているかのように、彼は「ライオンが何を感じていたか全くわからなかった」と記されている。一方、ウィルソンは「何かをわかって」いるから、「あっぱれなライオンだよ、あいつは」と述べる。

このように、ウィルソンは狩猟ガイドという職業にありながらも、殺害される動物たちの気持ちがわかる人物であるように描かれている。彼は、ライオンだけではなく、水牛の理解者でもある。三頭登場する水牛もまた「成牛」(old bulls)である。無残に殺戮される水牛の怒りは、止めをさしにきた人間に「猛然と頭を振り回しながら、豚のような目に怒りをこめて、荒々しい吠え声」をあげて最後の抵抗をする。ウィルソンは、「堂々たるもんじゃないか、三頭とも」と誉める。

ヘミングウェイは、闘牛を好み、「激烈な死」を作品で何度も描いた作家である。「マカンバー」では、勇敢に最後まで人間に立ち向かったライオンと水牛の激烈な死が、ライオンと水牛の視点に立って描かれる。ウィルソンは、動物たちの勇敢さを讃えて、「見事」「あっぱれ」と賛辞を繰り返す。ライオンには、(hell of a fine lion)、三頭の水牛には (hell of a looking thing) と誉め、フランシスと共に死ぬ水牛には、(hell of a good bull) と弔辞を述べる。この賛辞は、マーゴットが夫の醜態を恥じて泣きながらテントに戻る姿を述べる表現 (a hell of a fine woman) にも通じる。したがって、ライオン、水牛、マーゴットは、「権力者から虐げられている存在」であるという共通項があることが示唆されているといえるだろう。前述したように、一見した印象では、悪妻に虐げられている臆病な夫というイメージが浮かんでくるが、しかし、実際的には、経済的に夫に依存するしかない弱者としての妻に、精神的な暴力を振り続けていたであろう夫の姿が読み取れる。美貌という、すぐに失われてしまうはかないものしか持ちえていない、夫からの精神的な蔑みに対抗する手段のない悲しい存在としてのマーゴットの苦しみは、手負いになっても尚、抵抗を続けるライオンや水牛の姿と重なっている。

弱者のマーゴットは、「大きな、無力な動物を車で追い回す」ことは「不公平」と主張する。その上、「無力な動物を車で追いかけてまわしたってだけ」で、「英雄にでもなったような口を」きくフランシスとウィルソンを批判する。この「無力」(helpless) という言葉の繰り返しが、男たちの女性を含む弱い者たちへの横暴を示唆しているように思える。支配される側のマーゴットが、長年横暴であった夫殺しを貫徹した後に、我を忘れて泣きじゃくる彼女の代わりに銃器係がライフルを拾いあげてやる場面は、フランシスの死が、マーゴットと銃器係の象徴的な共謀によってもたらされたものであったのだと示唆されているように思える。

ヘミングウェイは、「二つの心臓の大きな川」について「この作品にはインディアンがいっぱい

いる」と述べているが、<sup>14)</sup> このことから、ヘミングウェイが、周縁に追いやられている人たちに、やさしい眼差しを向けていることがわかる。「マカンバー」にも、アフリカの使用人たちが、ほとんどセリフはないものの、主人公たちと同じ頻度で登場する。この短編の冒頭は、ライオン狩りで醜態を演じたフランスたちが昼食をとる場面だが、食事系の少年が、交わされる会話の内容を理解できることが、彼が、飲み物を実際に命じられる前に作り始めることでわかる。しかし、使用人の感情に無頓着なフランスは、ウィルソンに、彼らへのチップの額についてあからさまに尋ねる。フランスは、使用人の親方が、チップを公平に分配するかどうかを気に病むが、ウィルソンは、使用人たちの清廉潔白さを知っているので「もちろんだとも」と答える。

フランスの醜態を知らない使用人たちが、彼の偽りの勝利を祝って騒ぐ行列に、銃器係たちが「加わらなかった」ことは、彼らの、偽りを嫌う誠実な性格が示唆されている。フランスがライオン狩りのルールを無視してでたらめに射ったとき、二人の銃器係は、しきりにワカンバ語で話し合うのだが、狩猟をやる資格を持ち得ていないように思われるフランスは、自己の失態にも気づかず、「命中させた」と述べる。このとき、銃器係の二人は話し合うこともやめて、「とても深刻な顔をして」、口を閉ざす。このような銃器係についての詳しい描写に、ヘミングウェイが銃器係たちを真実を見抜くことのできる存在として扱っており、彼等には重要な役割を与えているように思われる。

やがて、ウィルソンや銃器係が草むらに手負いのライオンを探しに行くことになる。臆病なフランスは、草むらに火をつけることを提案したり、「勢子に追い出させよう」と逃げ腰になる。ウィルソンに危険であると注意されると、「じゃあ、銃器係は？」と言う。このことは、銃器係などは死んでも構わないという、白人有産階級の横暴な心が表れているといえよう。フランスは、自分は、草むらに行きたくない、ライオンは放っておけばいいという態度をとり、狩猟の世界には不適切な身勝手な存在になっている。

手負いのライオンを草むらに探しに出かけるとき、先頭に立って血の跡に目を凝らす銃器係は、年長 (the old) であり、コンゴニという名前も与えられ、存在感がアピールされる。この場面で、フランスは突進してくるライオンを見た瞬間、なりふりかまわず逃げ出すのだが、「二人の黒人と一人の白人が軽蔑の眼差しでこちらを振り返るのを見て」から、ライオンの死を知る。これまで、建前で生きてきた彼にとって、強烈な恐怖と屈辱を体験したことが、後の変身への準備段階となったといえよう。

ヘミングウェイは、公民権運動が盛んになる60年代より40年も先立って、20年代という早い時期に『われらの時代に』のなかの短編「拳闘家」で、黒人のもつ品位や尊厳のようなものを描いた。黒人のバッグズと、もとチャンピオン拳闘家である白人のアド・フランスの友情ともいえる強い結びつきが示され、洗練された会話の持ち主で、物腰の柔らかなマナーを心得ている黒人が登場する。また、逃亡奴隷ジムとハック少年の暖かい心の交流が読者を魅了する『ハックルベリーフィンの冒険』に対して、アメリカの近代文学の始まりであるという賛辞を送ったのは、「マカンバー」同様のアフリカもの『アフリカの緑の丘』においてであった。黒人の人権問題が表面化するまでは以前に、白人たちが無視し続けた黒人たちの心の中に内在する高尚な精神や威厳に注目し、作品の中で静かに描いてきたヘミングウェイの弱者たちに対する暖かい眼差しが感じられる。

#### 4 フランス・マカンバーの目覚め

35歳のフランスは、スポーツマンであり、体型が衰えないように努力する体裁を気にする男だが、ライオン狩りの醜態を秘密にしてくれと嘆願する。ウィルソンは、「情けない臆病者であるばかりか、度しがたい卑劣漢」と軽蔑する。さらに、「中年になるまで、子供っぽさを留める、あの

アメリカ人特有の顔」と形容し、「アメリカ人というやつは、本当にわからないもんだ」と思う。ここには、ヘンリー・ジェームズが描いた国際テーマともいえる「無垢なアメリカ人」としてフランシスが描かれる。このようなフランシスが自己変革を果たすのは、旧大陸ヨーロッパではなく、未開の国アフリカである。マーゴットが変身した夫に対して、「やけに勇敢になったのね、やけに突然に」と述べているが、フランシスの目覚めは「突然に」ではなく、3日の間に徐々に訪れるのだ。

故郷のアメリカでは、優雅に建前で生きていたフランシスの人間的な生々しい本音の感情への目覚めは、ライオンの遠吠えを聞くことから始まる。手負いのライオンを草むらに探しに行く前に、フランシスは水を飲みたいと言い、コンゴニが、自分の水筒をベルトからはずし、フランシスに貸してやる場面がある。

……who took it [a canteen] noticing how heavy it seemed and how hairy and shoddy the felt covering was in his hand. He raised it to drink and looked ahead at the high grass with the flat-topped trees behind it. A breeze was blowing toward them and the grass rippled gently in the wind. He looked at the gun-bearer and he could see the gun-bearer was suffering too with fear. (416)

「それを受け取りながらマカンバーは、こいつはずいぶん重いな、本体を被っているフェルトも毛ばだっていて手触りが粗っぽい、などと考えていた。それを持ち上げて水を飲みながら、彼は、前方の丈の高い草むらと、その背後の、梢のひらたい木を眺めた。微風がこちらに吹きわたってきて、草むらがおだやかに波打った。彼は銃器系のほうを見た。その男もやはり恐怖を味わっていることに、そのとき気づいた。」

この何気ない描写には、多くのことが読みとれる。銃器系の持っている水筒が使い古された安物であることは、彼らの貧しさを、趣味で狩りをしているフランシス同様に、銃器系にも恐怖感があるのだが、生活のために死と向き合わねばならないことが。フランシスは、ライオンを撃ったことによる激しい恐怖から、これまでにない体験を済ましており、勇敢な男へ変身する第一段階を通過している。以前の彼なら、貧しい者たちの哀しみなど気にも留めなかったはずである。コンゴニの水を飲んだということは、コンゴニによるフランシスの洗礼の儀式ともとれる。この引用では、受洗後のフランシスにアフリカの自然もやさしく接しているように描写されている。

すでに述べたように、この後、フランシスは、突進してきたライオンから一目散に逃げ帰る。しかし、このことは、さらに生々しい感情をフランシスが味わったことになる。そして、さらに、彼に生の感情を沸き立たせたものは、妻を寝取られたウィルソンへの激しい嫉妬心である。「これまでに憎んだ大勢の人間の中で、誰よりもロバート・ウィルソン」を憎むようになる。水牛狩りで、車からフランシスが撃とうとすると「車から撃つんじゃない、阿呆が！」と叫ばれ、この瞬間にフランシスの胸から「恐怖が消え」、ウィルソンへの「憎悪がめらめらと燃えさかった」と描写されている。

この時点で、フランシスの変身への準備が完了する。以後、彼は「酔ったような心の高揚」を覚える。銃器係が一人いなくなったことを知らされて、変身を果たしたフランシスは、やさしささえ示して心配する。ライオンのときと同じ状況になって、茂みに傷ついた水牛を探しにいかねばならなくなったときも、フランシスは、恐怖を全く感じず、積極的に探しにいかうとする。「はげしいわけのわからない幸福感」(wild unreasonable happiness) に酔うフランシスは、もはや建前ではなく本音で生きている。このような感情は、フランシスのように気取った生き方をしてきた者たちには味わえなかったもので、女性や、未開の原住民たち側の感情であるともいえ、フランシスが

それまで虐げてきた被支配者側の人間たちの気持ちがわかるようになったことを表わしている。変身を果たしたフランシスの最後は次のように描写される。

Francis Macomber lay now, face down, not two yards from where the buffalo lay on his side …… He [Wilson] knelt down, took a handkerchief from his pocket, and spread it over Francis Macomber's crew-cropped head where it lay. The blood sank into the dry, loose earth. (430)

「横倒しになったバッファローから2メートルと離れていないところに、フランシス・マカンバーはうつ伏せに倒れていた……彼 [ウイルソン] はその場にひざまずいて、ポケットからハンカチをとりだし、フランシス・マカンバーの短く髪を刈った頭部の上にそれを広げた。かさかさとした乾いた地面に、血がしみ込んでいった。」

この場面で、ウイルソンは、(hell of a good bull) と水牛への弔辞を述べるが、フランシスの死も、変身を遂げて勇敢になった男の見事な臨終であり、共に倒れる姿は、殉死や心中のようにも思える。血は、殉教者の流した血、イエスの血につながるのではないだろうか。

## 5 「マカンバー」における信仰

フランシス・マカンバーという名前には、多くの意味がこめられている。フランシスとは男子の名で、アッシジの聖フランシスコを思い浮かべることができる。この名前に由来するとすれば、フランシスが死を代償にして神の教えに目覚めたといえ、Cleanth Brooks もフランシスの変容を「改宗」と呼んでいる。<sup>15)</sup> 1927年にヘミングウェイは、最初の妻ハドリーと離婚し、二番目の妻でカトリックの信者であるポーリーンと結婚したことで、カトリックに改宗した。結婚のための改宗とはいえ、ヘミングウェイは、カトリック教の教えに触れたことになるし、彼自身も、カトリック信者であることを好んでいると発言している。<sup>16)</sup> 母が信仰していたキリスト教には、むしろ、反発していたヘミングウェイであったが、カトリック教の国であるフランスやスペインを愛し、訪れ、小説に描いたことから、信仰団体という制度としての宗教というよりは、何かカトリック教的なものに親近感を抱いていたのではないだろうか。

「マカンバー」は、ヘミングウェイの改宗後、約10年を経て出版されたが、「神」の存在への言及がある。ウイルソンが生きる指針としていた「人間死ぬのは一度きり、いのちは神から借りたもの、ですもの。卑怯な心はサラリと捨てて、……今年死んだらもう来年は死ぬ必要がなくなるわよ。」という『ヘンリー四世』に登場する、フランシス・フィーブルのセリフは、人間と神との関わりを論じたものであり、妻に撃たれる瞬間に、フランシスが見る「白熱した、目もくらむような閃光」は、弾にあたったときの状況説明ではあるが、神からの「光」を得たとも読める。

フランシスという名はまた、同じ発音でスペリングが違うフランシス (Frances) という女子の名でもあり、『日はまた昇る』のロバート・コーンの恋人の名前でもある。この男女の見分けがつかない名前に、前述した交錯するジェンダーのテーマが潜んでいる。さらに、ウイルソンが座右の銘にしている句を述べるフランシス・フィーブルは、女物の仕立屋をしているために女言葉で話し、名は体を表わしていて、ひ弱なか細い男性である。彼は、軍人募集の面接に召集される6名のうちの一人であるが、兵役を逃れようと逃げ腰になる者たちの中で一番勇敢であり「卑怯な心はサラリと捨てましたからね」と潔い。ヘミングウェイは、このように華奢で女性的なフランシスが勇敢であり、男性的な男たちが臆病であるという設定から、本短篇の構想を得たのではないだろうか。フランシスの姓には、ヘミングウェイの周縁化された者たちへのやさしい眼差しを例証するように、

指導者・隊長を意味するアフリカの言葉ムクンバ (M' Kumba) が、採択されている。(高見 400)

フランシスは、アフリカでの狩猟におけるさまざまな体験から勇敢な男へと変身を果たした。死によってこの幸福感は永遠のものになる。死を美学に到達するまで高めたいと思っていたヘミングウェイは、「マカンバー」で、この望みを現実のものにするヒーローを登場させた。フランシスは、妻に殺害されたが、『老人と海』のサンチャゴが言うように、「人間は殺されるかもしれない、けれど負けはしない」のだから、彼は、勝ったのである。

ヘミングウェイは、名作『老人と海』を執筆したはるか以前から、社会の中心から周縁化された立場にある人物たち——女性・アフリカの現代人・動物——へやさしい眼差しを向けていた。ヒーローに変身したフランシスの被支配者たちへの眼差しの変化によって、白人の植民地支配という状況が、自らの脱構築を迎えることになる。ヘミングウェイの弱者へのやさしい眼差しは、植民地主義の終焉、マイノリティの活躍という20世紀後半の時代を先取りしている。

こうして、ヘミングウェイが本短編を好む理由としては、白人男性が主体のマッチョな世界とは別の、女性・銃器係・動物たちが重要な役割を演じて、フランシスの変容を可能にした点にあるのではないだろうか。ヘミングウェイ作品の中では、異質な立場にあるといえる「マカンバー」は、『コスモポリタン』という雑誌に掲載されることを意識した作家の意図が働いて書かれたものである。このように「様々な読みが可能である」(メッセン 156) ことが「マカンバー」の最大の魅力になっているといえる。

## 注

- 1) テキストは、Ernest Hemingway, “The Short Happy Life of Francis Macomber” in *The Essential Hemingway* (London: Grafton, 1977) を使用。以後、「マカンバー」と記す。同書からの引用は、( ) の中に頁数を記す。
- 2) Philip Young, *Ernest Hemingway: A Reconsideration* (New York: Harcourt, 1952), 69-74.
- 3) Warren Beck, “The Shorter Happy Life of Mrs. Macomber” in *Modern Fiction Studies* 1 (Nov., 1955), 28-37.
- 4) Carlos Baker は、ヘミングウェイが描く女性のなかでも「最も破廉恥」(*Hemingway: The Writer as Artist*. NJ: Princeton UP, 1963, 187) と述べ、Roger Whitlow は、ピッチ性を否定せず、(*Cassandra's Daughters: The Women in Hemingway*. Westport: Greenwood, 1984, 65), Nancy R. Comley は、「金持ちのピッチ」と言い (Nancy R. Comley and Robert Sholes. *Hemingway's Genders: Rereading the Hemingway Text*. New Haven: Yale UP, 1994, 40), 今村楯夫は、「悪女の中でも最高の悪女」(『ヘミングウェイと猫と女たち』新潮選書 1990年, 162) と定義している。
- 5) 引用文の邦訳は、高見浩訳を参照。『ヘミングウェイ全短編 2』高見浩訳 新潮文庫1996年。以後、同書からの引用は、( ) の中に筆者名と頁数を記す。
- 6) James R Mellow, *Hemingway: A Life without Consequence* (London: Hodder & Stoughton, 1992.), 444.
- 7) Rena Sanderson, “Hemingway and Gender History” in *The Cambridge Companion to Hemingway ed. by Scott Donaldson* (New York: Cambridge UP, 1996), 185.
- 8) 丸田明生, 『ヘミングウェイの女性たち』, 194-198 (国書刊行会: 1995年)。以後、同書からの引用は ( ) の中に筆者名と頁数を記す。
- 9) Bernice Kert, *The Hemingway Women* (New York: Norton, 1983), 489.
- 10) 新美澄子, 「ウーマンリブからフェミニズムへ」『アメリカの対抗文化』大阪教育図書 1995年, 440.
- 11) Peter Messent, *Ernest Hemingway* (London: Macmillan, 1992), 158. 以後同書からの引用は ( ) の中に作者名と頁数を記す。
- 12) Kenneth Lynn, *Hemingway* (NY: Simon & Schuster, 1987), 434.

- 13) John Killinger, *Hemingway and the Dead Gods: A Study in Existentialism*. (Lexington: UP of Kentucky, 1960), 76.
- 14) 今村楯夫, 「もう一つの失恋物語——アーネスト・ヘミングウェイ「兵士の故郷」『アメリカ短篇小説を読み直す』北星堂書店 1996年, 292.
- 15) Cleanth Brooks, *The Hidden God: Hemingway, Faulkner, Yeats, Eliot and Warren* (New Haven: Yale UP, 1963), 15.
- 16) Matthew J Bruccoli ed. *Conversations with Ernest Hemingway* (Jackson: U of Mississippi P, 1986), 96.